

筑後川下流右岸地区の環境

歴史・文化

- 佐賀平野には、江戸初期に成富兵庫茂安が築造した水利や治水にまつわる多くの遺構があります。石井樋から水を引いた多布施川は「水清く白砂青松の川」として親しまれ、現在でもカヌーや水遊びなどに利用されます。また、平成18年には疎水百選に選定されました。
- 田園地帯に広がるクリークもまた生活に利用されていました。クリークの水をろ過して飲料水として用いるとともに、子供達が泳いだり釣りを楽しむ場となりました。上水道が整備された現在でも、「たなじ」「かわじ」とよばれる階段状の水くみ場が残っています。
- 化学肥料がなかった時代には、冬にクリークを干し泥土を肥料として水田へ入れる「ごみくい」が行われていました。「ごみくい」はクリークの水質維持、浚渫などの役割も兼ねていました。クリークの深みには「ぬくめ」とよばれる魚の越冬場が作られ、「ぬくめ開き」というクリーク干しの時に魚を捕まえて食用にされました。これらの行事は、現在も地域のイベントとして残されています。
- 水が温む季節になると、子供の水難防止、水害防止、水への感謝などを込めて「ひゃあらんさん祭り」が、収穫の秋には氏神様に豊作を感謝する「おくんち」などの年間行事が行われます。また、「ハンギー」とよばれる桶に乗ってヒシの実を採ることもあります。



大正期の多布施川
出典：佐賀市史



クリークの水を貯めてろ過する
「はんづうがめ」の構造
出典：佐賀市史



クリークの階段状の水くみ場
「かわじ」
出典：佐賀市史

筑後川下流右岸地区の環境

景観

- 広大な農地、社寺林、水路、クリークなどからなる田園景観がみられます



見渡す限り広がる干拓地の農地は、佐賀平野の田園景観の基盤であり、水と土と人の知恵とが築き上げた豊かさの象徴でもあります。クリーク沿いの社寺林などの木々は、単調になりがちな田園景観に変化を与えるだけでなく、人々の休息の場となり過ごしやすさを連想させます。



用水が貯留され、緑に縁取られたクリークもまた佐賀平野の代表的な景観要素です。室町から昭和にかけてつくられた石積みの干拓堤防も、先人の苦勞を偲ばせます。

筑後川下流右岸地区の環境

環境と生物の多様性



- 脊振山麓から流れる河川・用水路と、平野部に網の目状に広がる大小のクリークがつながり、複雑な水路網を形成しています。これらの水路網には、立地環境や流速に応じて、花崗岩が風化した真砂や有明粘土からなる泥が堆積し、様々な生物に生息・生育の場を提供しています。さらに水生植物や周囲の社寺林・屋敷林などの樹林地、農地が加わり、環境をより多様なものとしています。
- 環境が異なればそこに生息・生育する生物も異なることから、佐賀平野では多様な生物たちがみられます。



一級河川嘉瀬川とその水を佐賀平野に配る川上頭首工



とうとうと流れる用水路や小河川



用水路や小河川がクリークへ流れ込む環境の変化点



流れがほとんどない低平地のクリーク



ハグロトンボ



セキシウモ



セスジイトトンボ



ギンヤンマ



マツモ



チョウトンボ



アサザ



ヒシ



アユ



カネヒラ



イシガイ



カゼトゲタナゴ



ギンブナ



ドブガイ



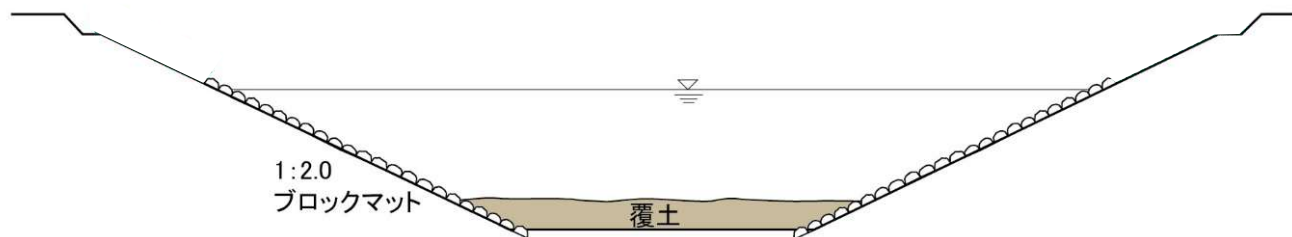
カワバタモロコ



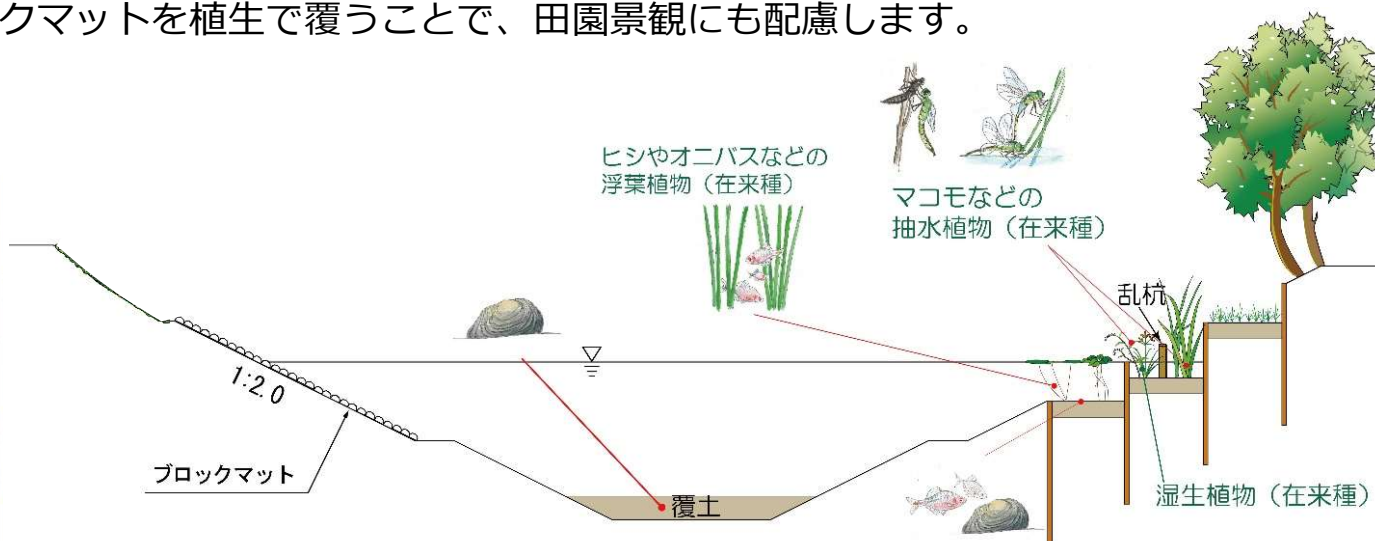
ニッポンバラタナゴ

筑後川下流右岸地区における 環境配慮の取り組み

- できる限り生きものが住みやすい水路をつくります



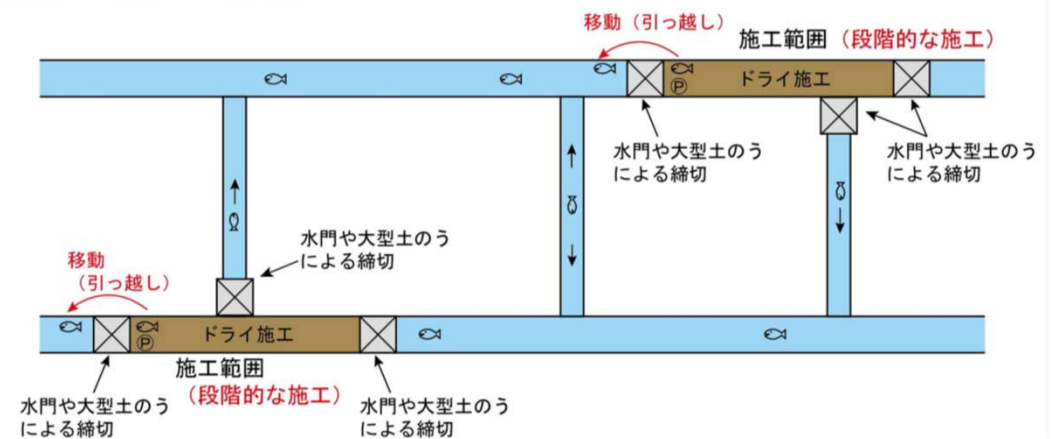
法面の安定や、貯水断面・通水機能を確保しながら、緩やかな法面に植生を定着させることで、できる限り生きものの住みかをつくります。ブロックマットを植生で覆うことで、田園景観にも配慮します。



特に重要な生物が生息・生育するところは、浅場を設けるなどにより生物の生息・生育環境を回復させます。

筑後川下流右岸地区における 環境配慮の取り組み

- 生物が避難できるように、長い区間を一度に工事することを避けて、工事を段階的に進めます。
- 工事区間に生息する魚類や二枚貝類などの動物や希少な植物は、となりの水のある水路に可能な限り移動させます。
- ブラジルチドメグサ、ホテイアオイ、オオクチバス（ブラックバス）などの侵略性の高い外来生物は、広がらないよう可能な限り処分します。
- モニタリング地点を設け、工事の前後に生物の調査を行います。



段階的な工事と生物移動のイメージ



工事区間での二枚貝の移動状況



モニタリング地点での魚類の調査状況



侵略性の高い外来生物

左からブラジルチドメグサ、ホテイアオイ、オオクチバス